

---

# スカートちらり

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スカートちらり

### 【Nコード】

N2384J

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

潤の気を引こうと朋子はわざと彼の周りでスカートをひらひらさせる。そんな露骨なアプローチの果てにあるものは。AKB48のシングルを聴いて書きました。

## 第一章

スカートちらり

由良潤の顔はいい。これははつきりと誰もが言えるものだった。目の光はしつかりとしていて一重だが形もいい。そして口元はややへの字気味だがラインも大きさも適度で確かなものがある。

細目の眉は鍵爪に似た曲がり方をしていてやはり形がいい。細面の顔に相応しく髪は黒く鬘の様になっている。背は高く引き締まった筋肉質の身体をしている。

外見は確かにいいがしかしであった。彼は極めて鈍感だった。

「おのれ、よ」

ここでやたら小さくて童顔の女の子が言う。背の高い潤とは対称的に背は百五十もない。口は大きく眉は細い。大きな目が殊更童顔に見せている。長い髪を後ろで結んでいる。

「全くね」

「あれ、まだ向こう気付いていないのよ」

「由良君」

「そうよ、全然ね」

こう友人達に返すのである。

「全く。何も気付かないわよ」

「やれやれね」

「全く気付かないの」

皆それを聞いてまずは呆れた。

「結構露骨にやってるのよね」

「確か」

「そうよ」

まさにその通りだと答える彼女だった。

「それでもよ。全然なのよ」

「じゃあどうすればいいかな」

「どうしたものかしら」

「考えてるけれど」

その小さな身体の小さな腕を組んだの言葉である。高校の制服はスカートレッドの上着とベスト、それに青いスカートが映える。青いスカートは当然ミニであり脚も目立つ。

ブラウスは白でネクタイも青だ。その青いスカートの下に彼女は白いハイソックスを身に着けている。格好を見ればかなりお洒落である。

「この格好だつて」

「綺麗じゃない」

「目立つし」

「目立つようにしてるのよ」

実際に彼女も言う。

「わざとね」

「あんた結構目立つしね」

「小さ過ぎてかえって」

「小さいのは気にしていないわ」

それは気にしていないのは事実だった。彼女は自分の小柄さをかえって気に入っているのである。それは何故かというところからとした根拠があった。

「だって。小さいとよく可愛いつて言われるから」

「まあそれはね」

「確かに余計に可愛く見えるし」

皆もそれには頷く。

「格好も目立つし」

「それで気付かないっていうのは」

「何であんなに鈍感なのかしら」

困った顔で言う彼女だった。

「本当に」

「ねえ朋子」

ここで一人が彼女の名前を呼んだ。

「あなた格好でそれで」

「ええ」

ちなみに彼女の名前は椎葉朋子という。

「しかも露骨に誘ってるわよね」

「そうよ。デートにね」

誘っているのである。これは事実だ。

「それでもね。気付かないのよ、幾ら誘っても何かかって気付かない  
し」

「これはあれね」

「そうね」

皆それを聞いて一つの答えを出した。その答えは。

「あれよ、作戦変更よ」

「それよ」

これを言うのであった。

「ここは作戦を変更しなさい」

「いいわね」

「作戦を？」

「そうよ」

こう彼女に言うのであった。

## 第二章

「そうしてそれでやりなさい」

「いいわね」

「作戦変更って」

こう言われても問題は具体的に何をするかだ。教室の中で自分の机に座りながら首を捻る。皆その彼女の周りに集まって話しているのである。

「具体的には何を」

「具体的にはあれよ。お色気よ」

「それがいいわね」

「お色気？」

そう言われるとまずは目をしばたかせた朋子だった。

「お色気っていうと」

「具体的には胸元よ」

「スカートよ」

「生足よ」

皆それぞれ言っていく。

「あとはお尻のラインとか」

「そういうものを」

「身体なの」

そう言われて今度はきょとんとした顔になっていた。

「身体を見せるの」

「言って駄目なら見せてよ」

「耳よりも目よ」

皆はまた言う。

「それでどうかしら」

「名付けてお色気告白スペシャル作戦」

一人は訳のわからない作戦名を告げる。

「いいわね、それじゃあ」

「それをしなさい」

「じゃあハイソックスは」

「それもいいけれど」

それは一旦認められた。ハイソックスのよさもわかっている彼女達であるのだ。

「それでも素足ね」

「それが一番ね」

「若しくは秘密兵器ガーター」

話が高校生から逸脱してきている。

「下着は当然黒よ、その場合はね」

「いいわね」

「黒なの」

「それも手よ」

「白と黒の威力は絶大だから」

語る女の子達の顔はかなり真剣なものであった。どうやら下着の凄まじい破壊力については身に着ける側として熟知しているらしい。

「どっちかが一番いいわよ」

「それで白だと」

また下着の色について話をしていく。

「ガーターする場合は。わかってるわね」

「白ね」

朋子もそれを聞いて頷く。彼女もわかっていた。

「それね」

「そうよ、白か黒で統一するのよ」

「わかってるじゃない」

「ええ。とにかく白なら白、黒なら黒ね」

また言う朋子だった。

「しかもあれよね。あえて見せないのよね」

「ちらりよ、ちらり」

「見えそうで見えない」

「それよ」

女の子達の朋子へのアドバイスはかなり真剣なものになっていた。

「見せないのよ、いいわね」

「最悪見せてもそれが最高の威力を見せるから」

「わかったわね」

「わかったわ」

そして朋子もまたその言葉を真剣そのものの面持ちで聞いて頷いていた。

「じゃあ」

「とにかくよ。彼は鈍感だけれど」

「男だから」

「そう、男の子よ」

とにかく潤もまた男である、このことを念頭に置きました。

### 第三章

「男の子だからね」

「気付かなくても興味は絶対に持つから」

「そこよ、頑張りなさい」

こう言っただけを送り出す。実際に彼女は次の日から素足になりたりガーターにしながらさりげなくを装ってそれで潤の側にさりげなく来て。これまたさりげなく身体を動かしてみせる。

スカートは折ってさらに短く見せている。それで動くとき本当に見えるそうである。

「どうかしら」

動いたうえで潤の様子をちらりと見る。

「これで」

するとだった。スカートがひらりと動いて見えそうになったのを意識してか。彼の目は間違いなくその場所に向かっていたのであった。

それを見て朋子は微笑む。確かなものを感じたからだ。

(よしっ)

そして内心微笑む。まずは手応えを感じたのである。

そのことを皆に話す。すると皆笑顔で言うのだった。

「いいわ、その調子よ」

「それでいいのよ」

明るい顔での言葉であった。

「間違いないわ、由良君かかってきているわ」

「確実にね」

「そう、確実になのね」

その話を聞いて頷く朋子だった。

「いけてるのね」

「ここでさらに攻める」

「あくまでさりげなくね」

「しかも意表をついて」

話が何処かゲリラ戦を語るものになっていた。少なくとも正攻法でないのもそれは当然のことであった。実際にこの作戦は不意打ちであるからだ。

「何度も何度もしていった」

「そうしていきなさい」

「よしっ」

皆の確かなアドバイスを受けて会心の顔になる朋子だった。

「それだったらこの調子で」

「一回で駄目なら二回」

「二回で駄目なら三回」

「何回でもやるのよ」

「さりげなくね」

真面目な顔で彼女達は朋子に話していく。

「気付かれないようにしてね」

「やっていきなさい」

こう言っただけであった。彼女の背中を押す。朋子はそれを受けてさらに潤の前にさりげなく来てやはり動いてちらりとしてみせる。今回は黒のガーターである。

それで少しだけ軽く動くのである。本当に見えそうになる。当然身に着けているのは黒だ。ブラもそれで統一しているがこれは彼女自身にも思わぬ効果を与えていた。

(何かいい下着を身に着けてこういうことしてると)  
こう思うのだった。

(自分でも女として引き締まるわね。それに)

それに、であった。

(自信も感じるし)

下着がよければそれで、なのだった。脱いでも見せてもいける、そう思っただけ自信が出て来るのを次第に自覚してきていたのである。

そしてそれは外にも出て来ていて。アドバイスをするクラスメイ  
卜達もこのことを言うのだった。

「あんた最近」

「綺麗になってない？」

「そうよね」

「あっ、そうかしら」

実際にそう言われた彼女もまんざらではない様子で返す。

「綺麗になったかしら」

「何かね。引き締まってきたし」

「それに自信も出て来た？女として」

「そうよね」

そんな様子を見ての言葉である。

「そのせいで何か」

「いい感じになってきてるじゃない」

「いい下着着けてると」

今は白である。白は白、黒は黒でいいのもわかってきたのである。

## 第四章

「自分でもいける、って思えて」

「成程ね、それでなのね」

「下着のおかげなの」

「ええ、何かこのままいけそうよ」

朋子はにこりと笑って皆に告げた。

「由良君をゲットするわよ、絶対にね」

「そうね。このままいけばね」

「もう少しでいけるかも」

「それでだけれど」

話が変わってきた。今度は告白についてであった。

「あんたから言うつもり？」

「このままやるの？」

「ええと」

そのことについてはだった。彼女もどうすればいいのかわからなかった。実はそこまで考えていなかったのである。

「それ、どうしようかしら」

「あんたから告白してもいいわよ」

「確実にいけるならね」

「言わせるのは………無理ね」

潤のことは見ての言葉である。

「由良君あんなのだから」

「だからね。それはね」

「無理なのね」

「そうね」

一人が朋子の今の言葉に伝えて述べてきた。

「由良君だからね」

「難しいわよ、それは」

「じゃあ私の方からいくわ」

朋子はそれでいくことに決めたのだった。

「頃合いを見てね」

「その頃合いは近いかしら」

「そうかもね」

皆ここでも考えながら述べた。

「それじゃあ本当に」

「どうするか考えておきなさいよ」

「相手が相手だから」

朋子はもう言ってきた。

「決めたわ」

「決めたって？」

「どうするの？」

「私から言っわ」

こう決めたというのである。

「私からね。由良君に言っわよ」

「そう、言っのね」

「自分から」

「ええ。ただ」

ただし、と付け加えてきたのであった。朋子の顔が慎重な面持ちになった。

「まだ仕掛けていきたいわね」

「仕掛けるの」

「まだ」

「ええ、だから彼気付かないから」

それを問題にしているのである。この辺り実に考えていると言えた。

「だからね。ここはね」

「そうなの。じゃあ」

「まだ仕掛け続けるのね」

「ええ、そうするわ」

「こう皆に述べた。」

「それでいいかしら」

「そうね。由良君のこと考えたら」

「それでもいいわよね」

「もつと仕掛けてからね」

「皆もそれで納得したのだった。」

「とにかく自分から仕掛けてね」

「頑張りなさいよ」

「わかってるわ」

最後は真面目な顔で頷く。何はともあれ彼女は本気で仕掛けそのうえで慎重に潤を陥落させるつもりだった。小さな作業員も真剣であつた。

そして今日もわざと短くしたスカートで潤の前に行き。さりげなくを装ってひらひらと動き回りながら彼のクラスにいる女友達と話をしている。

## 第五章

当然この女友達とも共謀している。何処までも慎重に策に徹していた。

「それだけでだけねどね」

「そうそう」

何気ない話を装ってである。そのうえでスカートがわざと動いて見せそうにしてみせる。見えてもそれはその時という意気で、彼女は動いていた。

しかしここで、であった。動いたその時にバランスを崩してしまった。

「あっ!？」

それで倒れてしまったのだがその倒れ方と倒れた場所が悪かった。

「あ、わわわわっ!」

「と、朋子!」

その友達も慌てて声を出して手を差し伸べようとしたが手遅れだった。朋子は背中から倒れ込んだ。しかもそこは潤の席の上だった。そのまま潤の上に着ちて。彼ごと倒れ込んでしまったのだった。

気付いた時は床の上だった。

「いたたたたたたたた……」

「大丈夫?」

下から彼の声がした。

「随分と派手に転んだけれど」

「え、ええ」

何とか応えながら起き上がろうとする。ここで気付いたのだった。彼の上に落ちている。彼がクツションになったのだ。

それで短くしていたスカートが。

「ちょ、ちよっと!」

慌ててスカートを元に戻した。何と完全にめくれあがっていてそ

れで白いショーツが丸見えだったのだ。顔を真っ赤にさせてそれで隠した。

「み、見た!？」

「何を？」

まだ下にいる潤から素っ頓狂な返事が来た。

「何を見たって？」

「そう、見てないのね」

このことにはほっとした朋子だった。

「よかった。流石にこんなにはつきりと見せるのはね」

「はつきり？」

「そうよ、はつきりよ」

彼の上からどきながら話していくのだった。

「そういうのはね。やっぱりね」

「はつきりとなんだ」

「そうよ、見せるのはあくまでちらりよ」

気が動転して冷静でなくなっている。それで今自分が誰に話しているのかわかっていなかった。女友達と話しているつもりになっていた。

「ちらり。だって由良君気付いてくれないし」

「あの」

「ここでも朋子は気付かない。

「何に気付かないの？」

「だから。いつも言ってるじゃない」

「いつもなんだ」

「そうよ。由良君をその気にさせないと告白してもよ」

女友達はそれを聞いて。啞然とした。

「まさかわかってないの?この娘」

「上手くいかないじゃない。だからいつも仕掛けてたけれど」

「そうだったんだ、好きだったんだ」

「そうよ…….……ってこれも言ってるじゃない」

朋子はたまりかねたように返した。

「全く。私が由良君のこと好きだって」

「そうだったんだ」

「そうよ。けれど彼中々気付かないから」

立ち上がってスカートの後ろの埃をはたきながら話していた。

「こうやってね」

「わかったよ」

声は頷いたものだった。

「それだったら。僕でよかったら」

「僕!？」

今の一人称でやっとおかしいと思いはじめたのであった。

「僕っていつたら」

「あの、椎葉さん」

気付いた時にはだった。目の前に立ち上がった潤がいた。我に返ったその時にだ。

## 第六章

「僕のこと好きだったんだね」

「あつ、しまったわ」

「あんた何やってるのよ」

女友達は何やら呆れていた。

「自分から言つて。しかもこんな形で」

「だって。いきなりこけたから」

「こけてもよ」

女友達突つ込みは厳しかった。

「言つたら駄目じゃない、幾ら気が動転していてもよ」

「しまった……」

「しまったじゃないわよ、今までの努力がパーじゃない」

「確かに」

「こうなつたらもう開き直るしかないわよ」

彼女は作戦変更を強要した。そして朋子もそれしかないのがわかっていた。

右手を拳にして胸の前に置いて気持ちを落ち着けてから。それから言つのであった。

「あのね」

「うん」

「もう言っちゃったけれど」

俯いての言葉だった。

「私、由良君のことが好きなの」

「そうなんだね」

「そうよ。だからね」

このことを告げてからさらに言つたのだった。

「由良君がよかつたら」

「いいよ」

彼の返答はこれだった。

「僕でよかつたら」

「そう。いいの」

「御免、今まで気付かなかったよ」

彼も照れ臭そうに言う。

「まさか椎葉さんがそんな」

「ずっと好きだったのよ」

俯いたまま顔は真っ赤になっている。とても見上げることはできなかつた。

「ずっとね。本当に」

「そんなに好きになつてくれるなんて」

「嘘じゃないわよ、好きよ」

また言う朋子だった。

「本当にね」

「じゃあこれからはね」

「ええ。もう素直に」

言葉を続けていく。

「するから」

「けれど僕でいいんだよね」

「だからいいのよ」

あらためて言うことになった。

「由良君でないとね」

「何か嘘みたいだよ」

潤は今度はこうしたことを言ってきた。

「今こうして。告白受けているなんて」

「最初からそのつもりだったわ」

このことも話した朋子だった。

「タイミングはもっと先にするつもりだったけれど」

「そうだったんだ。じゃあずっと僕のことか」

「そうよ」

朋子はこくりと頷いた。

「ずっとね。好きだったのよ」

「有り難う」

潤はこのことに礼を言ってきた。

「有り難う」

「有り難うって。どうしてここで」

今の彼の言葉に少し戸惑いを覚えた朋子だった。

「何で言うの？」

「好きになってくれて有り難う」

こう言うのだった。

「僕を好きになってくれてね」

「だから有り難うなの」

「うん、だからだよ」

また言ってきたのだった。

## 第七章

「だから僕もそれに応えるから」

「ええ」

「これから。宜しくね」

笑顔で朋子に告げるのだった。何はともあれ朋子はその告白に成功したのである。

朋子の成功は皆の知るところになった。それを聞いた女友達の面々は口々に言った。

「結果オーライだけれど」

「何か最後の最後、ツメの場面で」

「どじったわよね」

「そうよね」

そのこけたことをまず言うのだった。

「何でそこでこけるのかしら」

「しかも由良君の上に落ちるなんて」

「有り得ないわよ」

そのことを言っではばからない。

「下手したらそれで終わりだったのに」

「朋子にしては珍しいミスだったけれど」

「まずいところだったわよ」

「けれど」

ここで話のニュアンスが変わった。

「告白はできたわよね」

「ええ、それはね」

「いけたわね」

このことは強く確認された。

「何とかね」

「それも成功したし」

「由良君受けてくれてよかったわよね」  
「このことは彼女達も素直によしとした。」  
「下手したらあれで終わりだったけれど」  
「由良君って思っていた以上にいい人なのね」  
「しかもよ」  
さらに話されるのだった。  
「朋子のことには気付いてなくても」  
「その心を受けて」  
「あの言葉をね」  
彼の出した言葉についても話される。  
「有り難うってね」  
「あれはないわね」  
「言えないわよ」  
「ってどうかそんなこと言った人はじめてよ」  
「こう言い合うのであった。」  
「自分を好きでいてくれて有り難うって」  
「それで交際スタートってね」  
「凄いい子よ、あの子」  
潤の人格も知られることになった。そしてその人格の評判はかなりよかった。少なくとも誰かから悪く言われるものではなかった。  
「ってことは朋子は最高の彼氏をゲットできたことになるのね」  
「そうなるわね」  
「けれど」  
「ここでまた一人が言った。」  
「今思ってたんだけれど」  
「どうしたの？」  
「好きでいてくれて有り難うよね」  
「この言葉から話すのだった。」  
「有り難うって。それであの娘を受け入れたじゃない」  
「ええ、そうよね」

「それがどうしたの？」

「つてことはよ」

「ここまで話してさらに言う彼女だった。

「それまでの朋子の作戦だけれど」

「あれね」

「スカートをわざと短くしてちらちらっていうあれよね」

「あれ、意味がなかったってことかしら」

「こう言うのであった。」

「だって。由良君朋子が自分を好きでいてくれること自体が嬉しいんじゃない」

「あつ、そうね」

「そうなるわね」

「皆もここで気付いたのだった。」

「じゃあやつぱり結果として」

「あの作戦意味がなかったのかしら」

「好きでいてくれるだけで受け入れてくれる人だから」

「そうなるのかしら」

「それはどうかしら」

「だがここで別の女の子が言うのだった。」

「確かに由良君は朋子の気持ちを受け入れてくれたわ」

「ええ」

「ありのままをね」

「彼女はまずこのことを話した。」

「けれど。朋子がああいうことをしなかったらこけなかったわけじゃない」

「こけなかったっていうと」

「きっかけがなかったってこと？」

「結果論だけれどね」

「この娘はとりあえずこう断りもする。」

「あれよ。そうやってちらちらさせて動いていたからこけて」

「由良君の上に落ちて」  
「パンツまで見せちゃって」  
考えてみれば朋子にとつてかなり恥ずかしい話である。  
「それで告白になったけれど」  
「それなのね」  
「そうよ。それよ」  
この娘はさらに話していく。  
「それが結果として告白になったじゃない」  
「一歩間違えればそれで何もかも終わりだったけれど」  
「それでなのね」  
「そうよ。それを考えればあれも意味があったのよ」  
「こう言うのである。」  
「告白につながったんだからね」  
「成程、そうなのね」  
「そういう考えもできるのね」  
「私はこう思うわ」  
ここまで話してこう述べるのだった。  
「それでどうかしら」  
「言われてみればね」  
「確かにそうね」  
皆もその意見一利あると思った。  
「じゃああれかしら。そうした全ての要因が重なって」  
「ハッピーエンドになった」  
「そういうことかしら」  
「そうじゃないかしらね」  
こんな話をしながら二人の恋のはじまりまでを振り返る彼女達であつた。何はともあれ朋子は目出度く潤と付き合つことができた、これは紛れもない事実であり否定できないものであつた。

スカートちらり

完

2009・11・13

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2384j/>

---

スカートちらり

2010年10月8日15時24分発行